

国語教育相談室

中学校
no.
64

光村図書



特集

本物の感動に出会う教科書

平成二十四年度版
「国語」のご紹介①

対談

馬場あき子
宗我部義則

教科書

クローズアップ

新しい学習指導要領と
新版「書写」教科書

探検！言葉の森 13 「やまなし」のシュールな会話？——森山卓郎

巻頭エッセイ
言葉と向き合う 02 スポーツ実況、瞬間を共感に——内山俊哉

特集 04 本物の感動に出会う教科書

—平成24年度版「国語」のご紹介①—

対談 豊かな言葉をつむぐ——馬場あき子・宗我部義則

12 新版 教科書クローズアップ

- ①等身大の中学生を主人公に—作者からのメッセージ
大丈夫、きっとなんとかやっつけていける——安東みきえ
「不思議アタマ」のススメ——椎名 誠
僕といっしょに、戦争を考えてみないか——浅田次郎
- ②すべては「言葉」から始まる
- ③多様なものの見方、考え方に会う
- ④時代を超えて伝わる言葉

22 感銘を受けた教材文——宮地 裕

26 ユニバーサルな教科書を目指して——澤田真弓

書写指導の
可能性を探る
特別編 2 32 新しい学習指導要領と新版「書写」教科書——宮澤正明

このたびの東北地方太平洋沖地震および長野北部地震で被害に遭われたみなさまに心よりお見舞いを申し上げます。また、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族のみなさまには深くお悔やみを申し上げます。

■ 弊社東北支社へのご連絡につきまして

東北支社は、一時営業を中止しておりましたが、4月5日より通常どおり業務を再開しております。お問い合わせやご連絡等がございましたら、下記までお願いいたします。

TEL.022-295-8821（月曜～金曜の9時～17時）

FAX.022-295-8886

■ 教科書・指導書などの供給につきまして

教科書や教師用指導書などの供給につきましては、万全を期して行っております。

そのほか、弊社ホームページでは、随時お知らせを掲載しております。

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

光村図書出版株式会社

スポーツ実況 瞬間を共感に

NHKチーフアナウンサー 内山俊哉

ニュースを読む、番組でリポートをする、ステージで司会をする。私たちアナウンサーが、さまざまな業務を担当する中で、スポーツ実況は、いささか特殊性が強い分野かもしれません。最大の特徴は、表現のほとんどを「即時描写」が占めていること、つまり「予め用意された原稿がない」ことです。

スポーツ実況は、コンマ数秒単位で変化するプレーに遅れることなく、現象を描写することから始まります。ラジオ実況の一例。「ピッチャー、投げました、打ちました、サードゴロ、一塁へ送球、アウト」。新人アナウンサーが初めて野球を実況すると、こうした「点描」になりがちです。目で見て頭で状況を理解していても、即座に言葉に表すのは難しいものです。しかも、一連のプレーはあつという間。この程度の表現でも、初めは「アー、エー」とまごついてしまい、動きになかなか追いつけません。「車窓の風景を片っ端からしゃべって、練習しろ」。新人時代、私も先輩から教わったものです。

経験を重ねていくうちに、最低限の描写に加え、プラスアルファの情報を言えるようになってきます。先ほどのサードゴロは、こう表現されるプレーだったかもしれません。「ピッチャー〇〇、サイドハンドから第三球を投げました、スライダー。打ちました、いい当たり！ 三塁線のゴロ。サード、横っ飛び、捕まりました！ 起き上がって、一塁へ送球！ きわどいタイミング、一塁は、アウト！ サード××のファインプレー！」。

文字に起こせば、台本のようですが、もちろん予めノートに書いておくわけにもいきません。事実関係は同じサードゴロでも、臨場感と情報量の差は点描と実

況の違いがおわかりいただけるでしょう。スポーツ実況は、視聴者のイメージを競技場に誘うものでなければならず、私は思います。ただ、単にテンポよく、早口で伝えればいいわけではありません。聞き手の理解や感動を妨げる早口、情報量過多の実況は、アナウンサーの自己満足に過ぎないからです。

スポーツを見る目を養い、価値基準、情報の優先順位を体得する。その上で、簡潔で、わかりやすい言葉、ふさわしいトーンでプレーを描写し、勝負のドラマを伝える。かれこれ二十年以上スポーツ実況に携わっていますが、いまだに試行錯誤が続いています。

「前畑ガンバレ」「飛んだ、決まった」「栄光への架け橋だ」。諸先輩方の実況の言葉は、名文句として語り継がれるものが少なくありません。オリンピックなどの世界の検舞台で、日本の金メダルの瞬間に立ち会い、自分の言葉で感動を伝える。スポーツ実況を志すアナウンサーなら、誰もが夢見ることもかもしれません。

せん。

実は、私には「日本、金メダル」の実況経験がありません。一方で、金メダルが期待されながら、届かなかった場面を何度も実況しています。銀、銅のメダルは、世界トップレベルの勳章なのか、金を逃した残念賞なのか。選手によって受け止め方はさまざまで、視聴者の反応も同様です。伝える側には、「おめでとーう」一辺倒とはいかない表現の難しさがあります。

二〇〇八年の北京五輪もそうでした。私は団体二連覇と、富田洋之選手の個人総合金メダルが期待された体操男子の実況を担当しました。しかし、団体では中国に及ばず、銀メダル。個人総合も中国選手が金、富田選手は器具の不具合など、アクシデントもあって四位、メダルを逃しました。そうした中で、十九歳（当時）の内村航平選手が個人総合で銀メダルを獲得したのです。

表彰式が始まりました。「この銀メダルをどう伝えるべきか」。生放送を続けながら、言葉はなかなかまとまりません

でした。内村選手は初めてのオリンピック。大躍進の銀メダルであることは間違いない。しかし、日本体操陣が目指した金メダルではない。そして、本来表彰台に立つべきエース富田選手の姿はない。

喜びと無念さが入り混じる中、場内に「シルバーメダリスト、コーハイ・ウチムラ」と内村選手が紹介されました。大きな拍手と歓声を耳にした瞬間、次の言葉が私の口から飛び出しました。

「これから長く、長く、コーハイ・ウチムラの名前が世界にアナウンスされるでしょう。十九歳で、今大会二つ目の銀メダル。アテネから北京へ、そして北京

からロンドンへ、夢をつなぐ、十代の活躍でした」

世界が新星の誕生を祝福している。拍手と歓声をそう受け止めた私は、銀メダル獲得という事実を、弾んだトーンでコメントしました。そして「アテネから北京へ、北京からロンドンへ、夢をつなぐ」の部分に、無念さと、次こそは金メダルをという期待感を込めたつもりです。準備も推敲もなく、咄嗟に出た言葉でした。今思えば、もっと適切な表現があったかもしれません。しかし、大会後、視聴者や関係者から温かい反応をいただいたことは、望外の喜びとなりました。

「二度とないその瞬間を、長く視聴者の皆さんに共感してもらおう」。私の究極の目標はそこにあります。そのためには、言葉の巧拙を超えたヒューマニティーが求められるのではないのでしょうか。見果てぬ夢を追いながら、私はこれからもマイクに向かいます。「ホームラン！」「シュート！」「決まったー！」何の変哲もない言葉に、あふれんばかりの思いを込めて。



内山俊哉
うちやまとしや

1964年、佐賀県生まれ。86年、NHK入局。アナウンサーとして東京のほか、福岡、佐賀、名古屋、松山に勤務。オリンピックは夏冬7回、ワールドカップは2010年南アフリカ大会まで5大会連続で現地から中継。現在の主な実況種目はサッカー、体操、野球（MLB）など。実況のほか、「Jリーグタイム」などの番組で随時、キャスターを務める。09年から解説委員を兼務し、大相撲などスポーツ全般のニュース解説も担当。

本物の感動に出会う

平成二十四年度版「国語」のご紹介①

教科書

新しい教科書の大きな特徴の一つは、生徒の心を揺さぶり、豊かな言葉を育む教材がさらに充実したことです。磨き抜かれた言葉と、個性的な視点によって生み出された質の高い教材は、生徒たちの心に新鮮な感動を呼び起こし、新たな言葉の世界への架け橋となります。今回の特集は、「読むこと」の領域をクローズアップし、さまざまな角度から、新しい教材の魅力を紹介していきます。

豊かな言葉をつむぐ

対談

馬場あき子
歌人

宗我部義則
お茶の水女子大学附属中学校教諭

馬場先生には、平成二十四年度新版の二年生教材に、「新しい短歌のために」を書き下ろしていただきました。この対談では、教材に取り上げられた短歌の鑑賞や実作の体験などについて、宗我部先生が馬場先生に聞きながら、豊かで美しい日本語とは何か、それを生徒に伝えていくにはどうすればいいのかを探っていきます。

短歌を好きになってほしい

宗我部 まず、この教材で、いちばん伝えたかったことからおうかがいします。
馬場 それは、なにより、中学生に短歌を好きになってもらいたいという思いです。現代の日本語は、響きや余韻、韻律というものを失っているのではないかと思います。詩や歌曲をはじめ、いろいろなものが散文的になっていきます。だからこそ、これからの時代を生きる子どもたちには、響きや韻

律による言葉の豊かさ、美しさ、うるおいたったものにしつかりとふれてほしいと思っ

宗我部 私も現場での経験から、言葉のリズムを子どもたちに教えるのは、やはり短歌や俳句といった伝統的な詩歌が最もふさわしいと感じています。

馬場 それは、千三百年、日本語を磨いてきたのが七五調の韻律だったからだと思うんですよ。五・七・五・七・七という型を砥石として、それに言葉に乗せて磨きをかけてきてきたのが日本語と言ってもいいんじゃないでしょうか。だから、そういうリズムは日本人の体が伝えているんですね。

宗我部 授業で、子どもたちに実際に短歌を作らせませんが、最初はすごく難しいと言

うんです。しかし、この七五調に乗せると、何気ない言葉が、作品として「立ち上がる」気がすると言います。子どもたちもとても喜んで作りますよ。

馬場 そうですね。俳句ももちろんですが、短歌の五・七・五・七・七というリズムに乗ると、日本的気分というものが味わえるので、嬉しく感じられるでしょうね。日本人は型が好きなんです。お花もお茶も、能も歌舞伎も、伝統芸能といわれているものはみんな型の芸術ですよ。ヨーロッパやアメリカでは個々の人がフォルムを生み出しますが、日本人はこの型を共有して、千年以上も使ってきました。

この教材は、日本人が伝えてきたそういう特有の韻律の面白さと、それが生み出す

言葉の力を知ってもらえるといいなと思っながら書きました。

教材の選歌に込めた思い

宗我部 この教材には六首が取り上げられています。どんな思いを込めて選ばれたのでしょうか。

馬場 最初に正岡子規の歌を置きました。くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる（※）

私も長い間、中学校や高校の教師をやっていました。そのときに、正岡子規とか、島木赤彦といった写生風の歌は全部飛ばして教えていなかったんです。内緒ですけど（笑）。生徒はきつと面白くないだろうと思って。でも、今、こういう歌は子どもたちにとっては、かえって新鮮ではないかと思っようになりました。

宗我部 この歌を子どもたちが読むと、「くれなるの薔薇の芽」というのは、どこのことなんだろうと、まず気にすると思うんです。「薔薇の花芽だから赤いんじゃないか」とか、「何か、とげの辺りもちよっと赤いよね」とか、子どもどうしで、いろいろと解釈について交流を始めます。



※本文で取り上げた短歌は、字詰めの都合で、すべて2行に分けて表記しました。



馬場あき子

歌人。文芸評論家。日本芸術院会員。朝日新聞「朝日歌壇」選者。東京都生まれ。中学校、高等学校で29年間教師を務めるかたわら、窪田章一郎の「まひる野」に入会し作歌に取り組む。現在、短歌結社「かりん」を主宰。歌集「葡萄唐草」で逕空賞、「月華の節」で詩歌文学館賞、「阿古父」で読売文学賞を受賞したほか、毎日芸術賞、朝日賞など受賞多数。平成15年に日本芸術院賞。「晶子みだれ髪」「額田王」などの新作品も手がける。評論に「鬼の研究」「女歌の系譜」など。

馬場 そういうことを敏感に気づいてくれるのはうれいいですね。私が、この歌を選んだのは、まさに「くれなゐ」という言葉が秘める力に注目させたいと思ったからなんです。科学的にいえば、「芽」は緑がかった茶褐色とか、緑からちよつと赤っぽくなっているという表現が正しいんでしょうか。だから、そうした色味を、ひと言「くれなゐ」と表現したとき、嘘を言っていることになる。でも、そこには美しさが生じます。そして、芽の色を「くれなゐ」と認めるときに、そこに薔薇の芽の生命をも感じ取ります。「緑がかった茶褐色」では命を感じないでしょう。

宗我部 「針」についても、とげのことだと言う子もいれば、新芽の先端のことだと言う子もいる。とても面白い授業の導入ができるんじゃないかと思えます。

馬場 そうですね。「針やはらかに」という表現だから、そうした多様な読みができるんです。さらに、「やはらかに」春雨が

ころを見せようという方法です。

宗我部 晶子のほうが古典的というのは面白いですね。むしろ時代の新しさを打ち出して、いこうとした歌人のようなイメージがあったんですが。

馬場 晶子にも、もちろん恋愛をテーマとしたものなど新しい歌はありますが、私はこんな古典的で温和な歌が、子どもたちには受け入れられやすいと思いました。

宗我部 子どもたちにも、自然がもつ寓意性をいろいろ想像させながら、歌を作って遊ばせたら楽しい授業になりそうです。晶子の歌は、そういう指導にもっていきたいですね。

馬場 それは、いい授業ができそうですね。ぜひやってみてください。

宗我部 ぐつと現代に近づいた次の二首。

海を知らぬ少女の前に
麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

寺山修司

降りかかる。「針やはらかに」というのは、針も柔らかいけれど、春雨も静かに柔らかに降っているという意味ですね。「三重に」やはらか「なんです。そういうところにも気づかせてあげれば、鮮やかに情景がイメージできるのではないかなと思っています。」

宗我部 今だったら、この歌は飛ばさないで教えられますよね（笑）。

馬場 ほんと、そうですね（笑）。子どもたちに、「くれなゐ」、これは、命の色だよ」って言ってあげたい。

蚊帳の中に放ちし蛍夕されば
おのれ光りて飛びそめにけり

俵 万智

斎藤茂吉はこの歌を取り上げました。この「おのれ光りて」も「くれなゐ」と同じで、命がこもった言葉です。自分の生命が光るんです。大人にならないと理解するのが難しいかなと思うんですけど、自ずから発光しているという生命力を、この言葉から感じてほしいと思って取り上げました。

宗我部 文語でも、口語的なイメージを感じますね。

馬場 内容が新鮮だからでしょうね。でも、寺山の歌は字余りがありますが、「海を知らぬ少女の前に／＼」と、五・七・五・七のそれぞれにきちんとした意味の切れ目があります。それに対して、完全に口語で歌う俵の歌になると、韻律と意味の切れ目が一致していない。

宗我部 「思い出の／一つのようで／そのままに／しておく麦わら／帽子のへこみ」子どもたちは、そう切って読みそうです。**馬場** 「句割れ・句またがり」というんで

宗我部 与謝野晶子の歌は、川ひとすち菜たね十里の宵月夜
母がうまれし国美くしむ

この一首を選ばれています。

馬場 「宵月夜」なんてすごく古い言葉なんだけど、綺麗な言葉ですよ。夕暮れの月夜」と言ったら八音になります。凝縮すると「宵月夜」という五音になる。凝縮した言葉には力が生まれ、意味がすぐく浸透します。アピールの力が強くなる。そういうことも発見してほしいですね。

宗我部 「川ひとすち」と強い入り方をし、最後には「美くしむ」というウ段の音が重なる柔らかさに変わっていく面白さがいいですね。

馬場 そこが晶子独特の、いいなと思わせるところですよ、きつと。

宗我部 「美くしむ」ではなく「美くしむ」。そこに、ふわりとした日本語の美しさがある。声に出して読み味わいたい歌ですね。

馬場 この歌は、宵月夜という風景の中に、二重写しに母の優しさを重ねている歌い方なんです。喩を用いた、どちらかというと古典的な歌い方ですよ。それに対して、茂吉は、自然に深いものを見ようとする。自然の一点をキツと捉えて、もつと深いと

すけれど、こういう口語短歌ならではの面白さも、ぜひ知ってほしいと思います。

宗我部 後に続く教材「短歌十二首」の中からは、次の一首について、ぜひおうかがいしたいと思っていました。

観覧車回れよ回れ
想ひ出は君には一日我には一生

栗木京子

現行の教科書にも掲載されている歌ですが、私があえて作者を伏せて、「この作者は男性？女性？」と子どもたちに問いかけてみました。すると、意見が真っ二つに分かれるんですよ。男の子が作った歌だということもかなりいたんですよ。

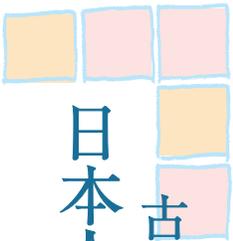
馬場 男の子でもいいわね。草食系の男の子が、「君には一日我には一生」と言っている姿を思うと絶対面白いですね（笑）。

宗我部 「どうしてそうとらえるの」と問いかけると、「君」という言葉は、男の子のほうから彼女のほうにかけられる言葉として使いたい」という意見が出たり、「思い出が自分にとっては一生のものだというのは、やっぱり女の子の感覚じゃないか」という子がいったりで、そういう多様な読み方ができるところが、教材として短歌の良さの一つだと思います。



宗我部義則

お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。埼玉県生まれ。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著に『中学校国語科新授業モデル 話すこと・聞くこと編』、『夢中・熱中・集中…そして感動 柏市立中原小学校の挑戦！授業リフレクションで校内研を変える』、共著に『読解力再考 すべての子どもに読む喜びを—PISAの前にあること—』など。



古典のリズムや語感は、

日本人の体を呼応させる力がある

宗我部



馬場 そうですね。おっしゃるとおり、短歌の読みは必ずしも一つじゃない。だから昔の歌だって、今は違った解釈をしているかもしれないんですよ。でも、それでいいじゃないですか。読みが三つあれば、三つの面白さがあるっていいことですから。

宗我部 作り手の方の側からそういう言葉をいただく、子どもも教師も、すごく自信をもちますね。

馬場 もうその歌は、作った人の手から離れているんですよ。何と解釈されようと思ったことではないというわけです(笑)。

古典教材との出会わせ方

宗我部 馬場先生は、『源氏物語と能』『式子内親王』などの本も出されて、古典の造詣がたいへん深くいらっしゃいます。そこで、教科書に取り上げられた古典教材について、お話をおうかがいしたいと思います。
馬場 私が古典に親しんだのは、まず百人

の感動を表しているんですね。ちょうど教科書に取り上げられている部分です。私は芭蕉の旅は、こうした未知と出会える、あるいは他者と出会うということがいけばん大きかったんだと思うんですけど、さらにあの緊張した文章からは、何か自己を確認しようとしているところも感じますね。

宗我部 そのあたりを少しでも感じられたらと思う、その授業では教科書に出ている序章の「月日は」のところと「平泉」の部分に加えて、平泉までの所々をダイジェストして読ませたんですね。そしてさらに旅や句作に関する芭蕉の言葉をいくつか紹介しました。例えば、今先生がおっしゃった「未知との出会い」や「自己確認」ともつながりますが、芭蕉は「昨日の我に飽くべし」という言葉を残していますね。「細道」をあちこち読み、こんな芭蕉の厳しい言葉にふれたある生徒は、「確かに旅先での発見も、旅の目的でもある。だが、人は旅先での発見よりも、もっと大きな発見をも

一首。それから平家物語です。ずいぶん覚えて、今でもソラで言えますよ。

宗我部 教科書では平家物語の「扇の的」を取り上げています。
馬場 いい場面ですね。声に出して読むと身に染みますね。

宗我部 平家物語や和歌に代表される古典文学のリズムや語感、日本人の体を呼応させる力があるのではないのでしょうか。

馬場 私が教師だったとき、どうしたら古典を伝えられるかと悩んだことがあります。自分がいくら面白がってやっても、それについてきてくれる子どもは極めて少ない。それで私は、もう古典は教え込む必要はないと割り切って、平家物語を講談風にして読んでやっただけです。そうすると、子どもたちは古典の時間を楽しみにするようになったんです。一時間ずつと読んでやるんです。それで平家物語を好きになった子がいっぱいいました。宗我部先生が言われたように、やはり古典のリズムや言葉の響き

う一度自分の現実と改めて向き合ったときに得るのではないかと書きました。未知と出会うことは自分と出会うことだったり、知っているつもりだった対象の本質みたいなものと改めて向き合うこともあるのかなと思つたようです。

馬場 そうですね。能因にしろ西行にしろ、芭蕉にしろ、旅というものは、自分と対峙して何かを納得しようとするものではないかと思つたかと思つたか。

宗我部 先生も、よく旅の歌を詠んでいらっしゃいますね。

馬場 ずいぶん外国に出かけて歌を作っていますが、なるべく、歴史とか文化とかがないところを選んで行っています。だから、フランスには行ってないんですよ。ルーブル美術館なんか見ると、文化に圧倒されて歌を作れないから。

宗我部 それって、松島で芭蕉が口をつぐんでしまうのと同じですね。
馬場 ほんとにそうですね。だから私が行

は、日本人をひきつけてやまない力をもっていると感じましたね。

宗我部 今、音読や朗読が改めて中学校でもクローズアップされているんですが、特に古典はそういう読み聞かせという方法に合っているんですね。

馬場 解釈なんていらんじゃないかって気もしますものね。

宗我部 三年生では「おくの細道」を学習します。私は、旅という言葉のもつイメージを自分たちと芭蕉とで比較してみよう、という授業をやってみました。子どもたちに旅のイメージをいろいろ挙げさせてみると、かなり重なったイメージをもっている。それはどういうことなのだろうと考えたわけです。どうも日本人にとつての旅というイメージの源が、この「おくの細道」にあるのではないかと思つたんですね。

馬場 いいテーマですね。「おくの細道」を読んで私が面白いと思うのが、平泉に行くことと文体がガラッと変わる。それが、芭蕉

くのは砂漠です。アフリカに行ったり、それからシルクロードをずっとたどって、三蔵法師が行った火焰山(かえんざん)を越えてみたり。そういう文化果つる地に行くと、人間がこんなところどうやって生きてるんだらうという気持ちが湧き、歌ができます。私は、絶えずそういう原点というものにつながっていないと歌が生まれてこないんですね。

歌が生まれるとき

宗我部 今、歌の「原点」というお話がありました。馬場先生が詠まれる歌は、先生がそのままご自身を語りかけてくるような感じがしています。例えば、

西行のさくらありわがさくらありて
小さけれどもわがさくら咲く

この歌にはものすごく感動しました。凛として咲く、先生ご自身の姿勢のようで。私も、いつかこういうふうにならなう。



つながつていないと歌は生まれません

馬場

新しい生命力に満ちた言葉を どんどん生み出してほしい

馬場

「咲く」と言いきれる我でありたいなど。
馬場 小さい桜ですよ（笑）。
宗我部 最近の作品では、「おばあさま」という十三首の連作はユーモアにあふれていますね。

おばあさまは「丹波の山ぎる」と
あいさつし幼きわれはいたくおどろく

霧降れば海の底なる丹波より
駆け落ちしてきたおばあさまです

馬場 口から出た言葉がそのまま歌になっていますが、そういうのも歌の伝統にはあるんですよ。



三歳か四歳のときの祖母の記憶です。「丹波の山ぎる」ってなんだろうというのがずっと疑問で、丹波のご出身の河合雄雄先生にお目にかかったときうかがったら、「あんな知らないのかいな。あそこは猿の国で、人間が少しばかり住んでるのや」とおっしゃった。「先生はどっち？」ってきいたら「人間や」って（笑）。少しの人間がいるというのがとってもユニークでしょう。
宗我部 そんなエピソードもうかがうと、歌のイメージがどんどん広がって、とても面白いですね。

馬場 短歌というのは、こういう口から出たままを歌うこととか、いろんなことができるんですよ。やっていくと、だんだん面白くなります。ぜひ作ってみてください。

宗我部 面白そうですね。ところで、先生は、初心者に対して、歌の作り方をどう教えていらつしやるのですか。

馬場 私は、「身の回りのものや出来事を、全部五音か七音で言ってごらん」って言うんです。例えば、「今日の暦で『大寒の』つ

さくら花幾春かけて老いゆかん
身に水流の音ひびくなり

私たちは、桜を何度も何度も見ながら年をとっていきます。だから昔の人の歌集には、必ず毎年桜の歌がある。しかも、年々に桜に託した人生観が変化していくのが読み取れて面白いんです。そういう「ものと経験とのつながり」も、言葉の豊かさに関係してくるのではと感じています。

宗我部 言葉が豊かになっていくというのは、言葉が表す意味と、対象そのもの、それと自分の経験がつながっていくことなのですね。

馬場 そう。だから「短歌十二首」の中の、桜はないのち一ぱいに咲くからに
いのち生命をかけてわが眺めたり

岡本かの子

この歌を教えたら、ぜひ満開の桜の木の下へ連れて行って、桜の花びらを浴びさせたい。満開の本当に美しい桜を見せてやれ

て言えばもう五音。あそこに咲いている『水仙の花』って言ったら七音。そうしたら『大寒の水仙の花』って、もうできつつあるじゃない」って教えるのね。次は「あなたがこっちを見てたから、『我を見て』ってやればまた五音じゃない」。そういうふうに見たもの全てを五音・七音にしてみることが始めようと教えています。

宗我部 そういう単純なことから始まるんですね。

馬場 特別な言葉でもなく、今見ているものから始める。初めは即物的ですよ。でも、それだともまらなくなるから、最後の七音を「頑張れと言う」「私は憐れむ」などとしてみる。ほかは即物的でも、最後の言葉でその人固有の場を作ればいいんです。それが叙情なんですよ。最後の一句がね。

宗我部 そういう積み重ねが、豊かな表現を生み出していくことですね。

馬場 いきなり豊かな言葉は獲得できませんし、言葉の発見は、ほんやりしてはできません。心が生き生きと動いていることが必要なんですよ。

豊かな言葉をつむぐ

宗我部 私たち国語の教師は、「豊かな言

ば、「いのち一ぱいに咲くからに」という言葉もすつと身に入るはずですよ。そういう現場と言葉のつながりはとても大事です。

宗我部 そうですね。私も、言葉を学ぶときには、教室で頭の中だけで学ぶのではないなと思っているんですよ。可能な限り、その言葉の生の現場に立ち合わせていくということは大事ですね。

馬場 自然の中に出てみると、花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声が聞こえてきます。すると、どうして歌を詠まないでいられようかという気持ちになる。これは生命力、命が共鳴し合うからなんですね。若々しい生命力を秘めた子どもたちに、ぜひその共鳴を新しい言葉でつむぎ出してもらいたい。

宗我部 この教材のタイトル「新しい短歌のために」には、そうした先生の思いが込められているんですね。

馬場 そうです。教材の末尾を、「短歌は今も、若い世代による若い言葉を守っているのです。」と締めくくりました。短歌はその時代の言葉や韻律を含み込みながら、千三百年、脈々と新しい生命を歌い継いできました。伝えられてきた美しい言葉大切にすればかりでなく、これからの時代にふさわしい新しい生命力に満ちた言葉を、どんどん生み出してほしいと願っています。

言葉が豊かになるとは、意味と対象、 経験がつながっていくことですね

宗我部

葉の使い手を育てたい」とよく言うのですが、そもそも「豊かな」とはどういうことなんでしょうか、どうしたらその使い手になれるんでしょうか、日々自問しています。

馬場 難しい問いですね。

宗我部 先生のお話をうかがっていると、意味の多様さや比喻など、言葉がもつ膨らみ、それから先ほどの平家物語のように、声に出して読むことで明確になる言葉の響きやリズム。そういうものにたくさん出会わせていくことが大事だということでしょう。

馬場 それは確かでしょうね。それから、これは私の歌ですけれど、

新版教科書

クロローズアップ

新しい教科書の魅力を、
今号と次号に分けてご紹介します。
今回は、「教材の力」をクロローズアップしました。

1 等身大の中学生を主人公に

—作者からのメッセージ—

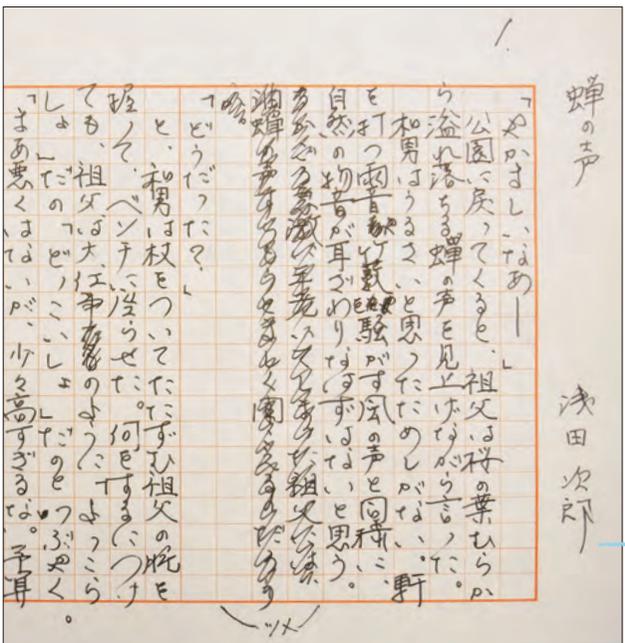
現代を生きる子どもたちと等身大の主人公の心情や、友達や大人との交流をテーマにした作品に出会わせたい。そんな願いを伝え、新たに書き下ろしてもらった文学作品が各学年に一作ずつあります。

ここには、子どもたちの本当の日常が描かれているので、共感をもって読むことができるでしょう。また、予定調和的な結末を迎えるのではなく、自分ならこの先どうするかと、子どもたちが自分自身に問いかけることができるような展開の作品となっています。

作者の方々に、作品に込めた思いや、中学生や先生方へのメッセージをうかがいました。



友達関係の微妙なすれ違いや、ほのかな恋愛感情をテーマにした「星の花が降るころに」
安東みきえ（1年）



▲浅田次郎氏直筆原稿



居候の叔父に寄せる甥の複雑な心理と、広い世界へのいざないを描く「アイスプラネット」
椎名 誠（2年）

蝉の声の降りしきる中、今まで秘めてきた戦争についての思いを祖父が孫に語り始める「蝉の声」浅田次郎（3年）

大丈夫、きっとなんとかやっついていける

—魅力的なタイトルですが、どんな思いが込められているのでしょうか。

私の家に、二階まで届くくらい大きくて、きれいなドーム型をした金木犀の木があるんです。木の中に入るとプラネタリウムのように、外の世界から遮断されたような感じを受けます。安心感があります。でも、そんな心地のいいところに、いつまでもいられるわけではない。外の世界は必ず存在していて、いずれ出ていかなければなりません。星の形をした花が散り始めた木を、そういう象徴として考えてみました。

—この作品は、女の子どうしのすれ違いが大きなテーマになっています。

私も経験がありますが、中学生の頃は、友人関係で悩むことがよくあります。そんな

なにも思い通りにいくわけではないし、始終すれ違いがあったり、自分や相手がいじわるな気持ちになることだってあります。

後で思い返すと、たぶんささいなことで、あのときあんなに深刻に思い悩む必要はなかったんだ、と今なら思えますけどね。でも、この頃の子どもって、特に友人関係では、ほんとうに小さな悩みでも、すごく落ち込んでしまう。最悪のパターンだと、命を落とすこともあります。そういう報道を見聞きするたびに、大人として、なんとかしなければと切実に思っていました。

いっぱい嫌なことはあるけれど、それでいっばい嫌なことはあるけれど、それでも頑張つてそれを「やり過ぎず」タフさをもつてほしい。そんな願いを、最後の、「大丈夫、きっとなんとかやっついていける。」という言葉に込めました。

現実の社会では、けんかした子たちが、必ず仲直りして元どおりのいい関係に戻るといふことばかりではない

「星の花が降るころに」(二年) 安東みきえ

けれど、でも大丈夫。川が流れていくように、どんな嫌なことも押し流して、新しい水がどんどん流れてくる。そんなエールを送りたかつたんです。

これを読んだときに、全員にすぐ伝わらなくてもいいんです。心の引き出しにしまっておいて、何かのときに思い出してくればいいなと思っています。

—男子のほのかな恋愛感情も織り込まれていますね。

そういう感情は、成長していく上で、とても大事なことだと思っています。また、この時期の女の子は、同級生の男の子がすぐく子どもっぽく見えて、先輩の男子に憧れるということがよくありますよね。でも、子どもにも見える同級生の男子でも、「なかなか、やるじゃん」と思える場面を描いて、男の子もがんばれと伝えたかった。

ただ、情景描写がロマンティック過ぎると、男の子が音読をするときに照れてしまうので、普通の小説を書くときと違って、甘くなり過ぎないような表現を心がけました。



児童文学作家。1953年、山梨県生まれ。
97年版の国語教科書に「そこまでべたら」が掲載。2001年に「天のシーソー」で椋鳩十児童文学賞を受賞。
主な著書に「頭のうちどころが悪かった熊の話」「夕暮れのマグノリア」「呼んでみただけ」など。

「不思議アタマ」のスズメ

「アイスプラネット」(二年)
椎名 誠

—この作品は、子どもたちに元気を与えたという気持ちを込めて書かれたとうかがいました。

僕は子どもたちに、スケールの大きなことを考えたり、ゆったりしてほしいと思っています。現代社会は、ともすれば小さい枠にはめ込もうとする力が強く働いています。そこから外に出る力をもってもらいたい、というメッセージを込めました。

その力をつけるには、僕自身の体験でいうと、本を読むことから始めました。そこから夢や疑問が生まれ、そこに描かれている世界を知りたい、行きたい、という思いが生まれ、実行してきました。

「本からその先へ」。作品のモチーフも、そういうところにあります。



小説家・映画監督。1944年、東京都生まれ。
89年『犬の系譜』で吉川英治文学新人賞、90年『アドバード』で日本SF大賞を受賞。
主な著書に『わしらは怪しい探検隊』『岳物語』『白い手』『大きな約束』など。

僕といっしょに、戦争を考えてみないか

「蟬の声」(三年)
浅田次郎

—「蟬の声」に込めた浅田さんの思いをおうかがいします。

戦後六十余年が経ち、今の中学生にとっては、第二次世界大戦は、僕らにとつては、日露戦争よりもっとかけ離れた感覚でしょう。僕も戦争未体験者ですが、僕が考えている戦争観と、中学生が考えている戦争観とは全くイメージが違うはずです。だから、「僕はこう考える」というのを中学生に提示して、「僕といっしょに考えてみないか」という思いを込めて書きました。

そして、もし中学生が戦争について興味を覚えたなら、もっと自分でいろいろと調べてほしい。自ら進んで得た知識こそが本物になりますからね。

僕は、自分の書いたものによって、百人

これは、古い考え方もかもしれないけれども、今こそ、そんな「その先へ」が求められているんじゃないかと思います。例えば、インターネット上で、モンサンミシエルの散歩道をたどることが出来ます。もうそれだけで行った気になってしまふ。未知の地にバーチャルで行けるといのはすごいことなんだろうけれど、僕はむしろ感じます。最初に知るきっかけはそれでもいいけれど、本当にきれいだと思ひ、行きたい気持ちをもったら、いつかは必ず、それを実現してほしいんです。

メッセージが大いにあるんです。定職を持ちなさいって、いつも僕の母に怒られていました。中学生は僕自身。あちこちで材料を探してきて、一緒に僕の部屋を造ってくれたこともありましたよ。僕はこの叔父さんからとても影響を受けたんです。

—叔父さんが、主人公に「不思議アタマ」をもつてほしいと呼びかけますね。

—そういう願いが、居候の叔父さんと甥との交流の中で描かれています。

ときどきアルバイトをしながら、世界を旅して写真を撮っている叔父さんが登場しますが、これはもちろん僕自身の投影でもあります。しかし、この叔父さんにはモデルがあつて、僕が子ども頃に、我が家に居候していた叔父さんのイメージが大きいんです。

—「不思議アタマ」というのは、行間とか話の続きとか、そこに書かれていないことや、いろいろなものを知りたがる頭脳のこと。さらに、自分の力でそれを考え、答えを探することができる頭脳です。積極的にいろんなものを読んだり、聞いたりしながら刺激を受け、常に「どうしてなんだろう」と考えている頭。現代を生きる子どもたちには、ぜひ「不思議アタマ」を鍛えてほしいという僕の願いなんです。

—一人、千人に一人でもいい、きちんと自分の人生を見つめ、方向を考えてくれる子どもがいてくれれば、それでいいかなと思う。戦争、祖父と孫、そういったテーマを通して、自分たちの血脈を真摯に見つめてもらうこと。この作品が、そういう一助になればと願っています。

ただし、僕は作家としてリベリズムというものを大切にしたいと思っています。自分のもっている思想をそのまま文章にするのは、読者に強要することになる。僕の記事によって、人生が変わる子もいるかも知れない。書かれた考え方をそのまま信じ込む子もいるかもしれない。そこには気をつけて書きました。

—浅田さんの作品は、どれも登場人物の姿

や言動がくつきり浮かび上がっていますね。

それは実経験から出てきたものではなく、読書によるものなんです。僕は、人より何倍も何十倍も本を読ん

きたつもりです。だから、頭の中にはいろんな作品のフレーズが詰まっているんです。人物造形をするときには、それを頭の中で思い起こしながら、「僕ならこうする」などと想像力を働かせながら作っていきます。いちばん大切なのは想像力。想像したものを表現するのが文学。想像力は読書によって涵養されます。十人の読者がいれば、十人の想像がある。本を読む値打ちはそれです。小説家に限らず、どんな分野でも、いちばんものをいうのは想像力なんです。

だから、中学生には、うんと背伸びをして、格好つけて、文学書を読んでほしいと思います。多少難しくても気にすることは少ない。小説なんていうのはパーフェクトに読む必要はないんです。なんだかわからないなと思ひながら、読み飛ばしていても構わないんです。

特に古い小説をお薦めします。今は文学に限らず、いろいろな自己表現の方法があるから、言葉の力も衰微している。そうではなかった時代の、力のある文章にぜひふれてほしいですね。



小説家。1951年、東京都生まれ。
95年『地下鉄に乗って』で吉川英治文学新人賞、97年『鉄道員』で直木賞を受賞。
主な著書に『蒼穹の昴』『壬生義士伝』『露町物語』『中原の虹』『終わらざる夏』など。

言葉に出会うために

これまで、
どんな言葉に出会ってきたらう。
そしてこれから、
どんな言葉に出会ったらう。
小学校で学んだことを確認し、
中学校の国語学習の準備をしよう。

教科書を開けば、たくさんの言葉が
あなたを待っている。
一語一語に出会う喜びを実感しよう。

気になる言葉に出会ったら、
立ち止まり、考えてみよう。
言葉はいろいろな表情を見せるはずだ。
何度も使うことで
かがやきを増す言葉もあるだろう。

友達を増やすように、
自分の言葉を増やしていこう。
言葉の数だけ、世界は豊かに見えてくる。
言葉の数だけ、未来は希望に満ちてくる。
言葉の数だけ、自分の可能性が開かれる。



言葉との出会いを八つの観点で

一年の第一単元に入る前に、国語の世界をコンパクトにまとめた「言葉に出会うために」を置きました。小学校での国語学習を再確認しながら、中学校へのスムーズな接続を図るとともに、国語学習の基本である言葉に対する意識を高めることを目的としています。

たくさんの言葉と出会い、自分の言葉を豊かにし、言葉に対する感性を磨くことは、子どもたちに新しい世界を開き、新鮮な感動を与えるはずで、折にふれてこの出発点に戻り、言葉との出会いを見つめ直してほしいという願いを込めています。

「言葉に出会うために」では、言葉を自分のものとしていくために必要な技能を八つの観点に分けて、それぞれの具体的な学習の仕方をていねいに解説しました。
すべての国語力のスタート地点ともいえるページです。

声を届ける

詩「野原はうたう」を声に出して読みながら、発声などのポイントを学び、「伝わる言葉」について考えます。

書き留める

ノートの取り方、活用方法を学びながら、たくさんの「言葉の記録」をしていきます。

本と出会う

本の見つけ方、図書館の活用法、読書記録の付け方を示し、さらに広い世界での「言葉との出会い」をつながします。

調べる

辞書・事典やインターネットを使って情報を集め、収集しながら「言葉の意味」を探求していきます。

言葉を読む

第一単元からはじまる作品を読み進めながら、「言葉の世界」を広げていきます。

言葉を知る

文法や、語彙の力など「言葉そのもの」を見つめます。

言葉を楽しむ

身近な自然や生活の中息づく「言葉の存在」に気づき、美しさを楽しみます。

いにしへの言葉に出会う

さまざまな古典に出会い、「伝えられてきた言葉」にふれながら、古人の思いや考え方を訪ねます。

文学・説明文教材

これまでも評価の高かった教材に加え、新しいものの見方、考え方と出会うことのできる教材が充実しました。
多様な筆者による個性豊かな教材は、生徒の感性を磨き、知的好奇心を旺盛にします。また、魅力的な文章だからこそ、そこで教えることもくつきりと浮かび上がっています。

磨き抜かれた言葉と幅広いテーマ——文学

教科書クローズアップ①で紹介した書き下ろし作品のほかにも、各学年に新しい教材を位置づけました。これまで長く親しまれてきた教材とともに、幅広いテーマで生徒の心に訴えかけます。



「雪とパイナップル」

鎌田 實 (1年)

「わたしは、うれしかった。人間ってすごいなあって、そのとき思ったのです。優しい心は、人から人へ伝染していくんだって。」

ロシアのベラルーシで医療活動にあたった日本の若い看護師と、患者の少年や家族との温かい交流を描く。



「旅する絵かき—パリからの手紙」

伊勢英子 (2年)

「僕は圧倒されて立ち尽くした。何十年前の少年が見た風景が、そのままここにあるんだよ。」
八十歳の造本職人との出会いを、美しいパリの光景の中に描く。

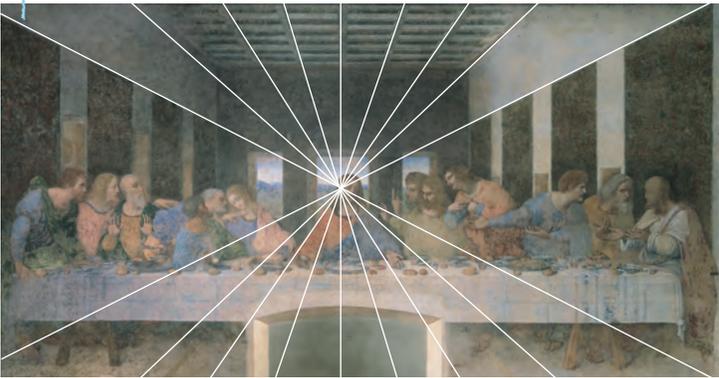
知る喜び・わかる感動——説明文

現代を代表する研究者の情熱にあふれる文章が、「知る喜び」をかきたてます。また、説明・解説型、仮説検証型など、さまざまな論理展開の文章構成は、「わかる感動」を呼び起こし、論理的な思考力や表現力を養います。

「君は『最後の晩餐』を知っているか」

布施英利 (2年)

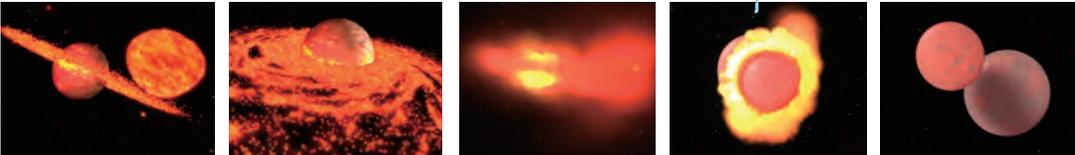
美術解剖学者が、名画「最後の晩餐」に施された緻密な計算を読み解く。



「月の起源を探る」

小久保英一郎 (3年)

月がどのようにしてできたのか、さまざまな仮説を検証しながら謎を解明していく。



⑤ 岩石の粒子が、互いに衝突、合体することで月ができる。 ④ 地球の周りに冷えて粒子となった岩石成分が円盤状に広がる。 ③ 地球の周りに岩石成分がまき散らされる。 ② 衝突の瞬間。 ① 地球に原始惑星が衝突する。
シミュレーションをもとにした月の起源の映像

文学

■ は新教材

一年	野原はうたう [詩]	工藤直子
	にじの見える橋 [物語]	杉みき子
	はじめての詩 [詩・解説]	荒川洋治
	詩四篇 [詩]	
	雪とパイナップル [読書 (物語)]	鎌田 實
	星の花が降るころに [物語]	安東みきえ
	大人になれなかった弟たち [物語]	米倉斉加年
	少年の日の思い出 [小説]	ヘルマン・ヘッセ
	木は旅が好き [詩]	茨木のり子
二年	明日 [詩]	谷川俊太郎
	アイズプラネット [小説]	椎名 誠
	新しい短歌のために [短歌・解説]	馬場あき子
	短歌十二首 [短歌]	
	旅する絵かき—パリからの手紙 [読書 (物語)]	伊勢英子
	盆土産 [小説]	三浦哲郎
	字のない葉書 [随筆]	向田邦子
	走れメロス [小説]	太宰 治
	言葉の力 [随筆]	大岡 信
三年	朝焼けの中で [詩]	森崎和江
	握手 [小説]	井上ひさし
	俳句の可能性 [俳句・解説]	宇多喜代子
	俳句十六句 [俳句]	
	蟬の声 [読書 (小説)]	浅田次郎

説明文

■ は新教材

一年	ダイコンは大きな根? [説明]	稲垣栄洋
	ちよっと立ち止まって [説明]	桑原茂夫
	江戸からのメッセージ [読書 (随筆)]	杉浦日向子
	シカの「落ち穂拾い」—フィールドノートの記録から [記録]	辻 大和
	流水とわたしたちの暮らし [説明]	青田昌秋
二年	やさしい日本語 [説明]	佐藤和之
	五重の塔はなぜ倒れないか [読書 (説明)]	上田 篤
	君は「最後の晩餐」を知っているか [評論]	布施英利
	モアイは語る—地球の未来 [論説]	安田喜憲
三年	「批評」の言葉をつめる [論説]	竹田青嗣
	月の起源を探る [説明]	小久保英一郎
	光で見せる展示デザイン [読書 (随筆)]	木下史青
	「記憶」と「資料」 [随筆]	沢木耕太郎
	ネット時代のコベルニクス—知識とは何か [論説]	吉見俊哉
	アラスカとの出会い [随筆]	星野道夫
	聴くということ [説明]	鷲田清一

4 時代を超えて伝わる言葉

— 伝統的な言葉、名文にふれる

長い間人々に受け継がれ、語り続けられてきた言葉は、未来を照らす力をもっています。古典の世界を身近に感じてもらえるような教材をはじめ、四季の恵み豊かな日本ならではの繊細な言葉や、自然の微妙な色合いを表す言葉など、たくさん美しい言葉に出会える場も設けました。

七夕に思う

— 語り継がれ、読み継がれてきたもの



江戸の町の七夕飾り
（「市中繁栄七夕祭」歌川広重）



ささ竹に短冊を飾る
（「七夕」歌川国貞）

● 古い時代から現代まで、さまざまな古典作品が読み継がれてきたことを知ろう。

「七夕に思う」 （1年）

千数百年前から綿々と文学に表されてきた「七夕」を紹介しながら、日本人の生きた姿、心を伝える古典文学への扉を開く教材。

春



春の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。春の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。

夏



夏の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。夏の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。

秋



秋の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。秋の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。

冬



冬の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。冬の訪れは、自然の恵みを感じ、心もほぐれ、新しい一年の始まりを感じ、希望を抱く。

色いろの言葉

自然とともに生活してきた日本では、同じ赤色にも微妙な違いを感じ取り、言葉の美しさを味わおう。



「季節のしおり」

各学年4か所ずつ、季節にまつわる古代から現代までの印象的な言葉、詩句などを紹介。右は1年の「季節のしおり」。

「色いろの言葉」

1年は緑、2年は赤、3年は青と、それぞれの系統の日本の伝統的な色の名前を各学年の裏見返しに掲載。自然に由来する名前を知り、言葉の美しさ、感性の豊かさにふれることができる。上は2年の一部分。

防空壕の穴掘りは、お母さんにはずいぶん厳しい作業だったろう。その場所の土砂などの状況にもよるが、スコップで一掘り一掘り、汗まみれになって掘っていく、さぞ過酷な労働だったであろう。

私は、実は仙台の青葉城址の真下、昔、城の堀の役割をもっていた小さい川の、その水面から数メートル上あたりの岩壁を鶴嘴で掘って、自分たちの逃げ込む防空壕を造った経験しかないのだが、当時の高専・大学の学生上がり、ひよろひよろの陸軍予備士官学校特別甲種幹部候補生たちには、決して楽な仕事ではなかった。しかも、数か月後アメリカの空軍機が水平線のかなたの空母から飛び立って仙台を襲ったとき、

この防空壕は直ちに役に立ったのだから、顧みて思えば、敗残の深い記憶の一つなのである。

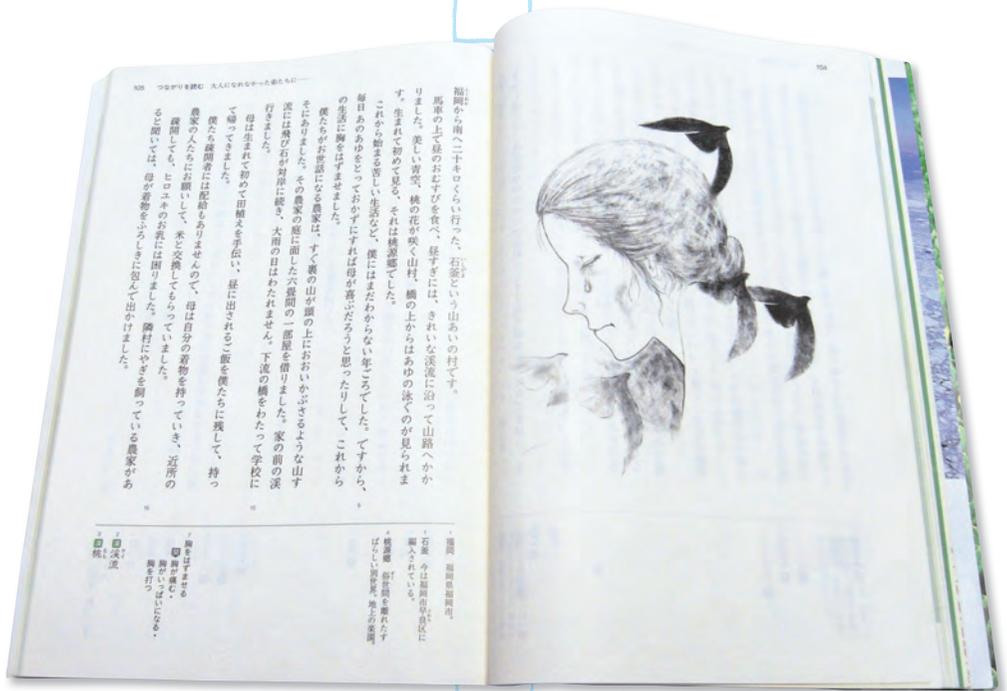
その後六十余年が経ったが、今から二十何年かの昔、仙台での国語学会の折に、私は一人ここを訪ねた。人を誘う気にはなれなかった。行ってみると、そこは草木の生い茂った堀になっていて、青葉城址の足下ながら、深山のせせらぎの趣きがあった。昔の姿を察することはできなかったが、意外に狭くて貧弱な堀であって、葎や草木に覆われていた。流れているはずの小川も、よくは見えない湿地帯であった。昔の風景や面影は、しばしば、こんなふうに記憶とは異なる現実として、眼前に現れるものなのである。

米倉さんのそのときの思いは、教材文の最後の一文「僕はひもじかったことと、弟の死は一生忘れません。」に集約される。私も準じて言わせてもらえば、「ひもじかったことと、先輩・友人たちの死は一生忘れませ

ん。」とつぶやきたい。米倉さんの文章の次の部分にも、私は感銘を受けた。

あまり空襲がひどくなってきたので、母は疎開しようと言いだしました。それである日、祖母と四歳の妹に留守番を頼んで、母が弟をおんぶして僕と三人で、しんせきのいる田舎へ出かけました。ところが、しんせきの人は、はるばる出かけてきた母と弟と僕を見るなり、うちに食べ物はないうちに行きました。僕たちは食べ物ももらいに行ったのではなかったのです。引越しの相談に行ったのに。母はそれを聞きなり、僕に帰ろうと言って、くるりと後ろを向いて帰りました。

そのときの顔を、僕は今でも忘れません。強い顔でした。でも悲しい悲しい顔でした。僕はあんなに美しい顔を見たことはありません。僕たち子供を必死で守ってくれる母の顔は、美しいです。僕はあのときのことを思うと、いつも胸がいっぱいになります。この時の、まだ子どもだった米倉さんの思いは、痛切なものとも哀切なものとも言えるだろうが、そのすべてをひっくり返して、



ういうものなのだろうと思う。

ヒロユキは病気になるりました。僕たちの村から三里くらい離れた町の病院に入院しました。

(中略)

十日間くらい入院したでしょうか。

ヒロユキは死にました。

(中略)

弟はその小さな小さな棺に、母と僕の手で寝かされました。小さな弟でしたが、棺が小さすぎて入りませんでした。

母が、大きくなっていったんだね、とヒロユキのひざを曲げて棺に入れました。そのとき、母は初めて泣きました。

切々と胸に迫る文章である。書かれているのはそのときの母の哀切な心情だが、米倉さんの母を想い弟を想う心情が、われわれ読者の胸に響く。離別・死別の悲痛な思いは、ここかしこに限りもなくあるこの世の中だから、一般化してしまえば何の変哲もないことだろう。しかし、一つ一つの具体のもつ妻みは深く鋭いものがあることを思わずにはいられない。

かと、いまさらのように感じ入っていたのだ。

米倉さんの文章に感銘を覚えながら、私は十歳の隔たりを考えさせられた。戦時中の共感ということよりも、幼かった頃の米倉さんのものの考え方や感じ方に、私は感銘を覚えているのだと思われる。

教材文であってもなくても、真情の表白に感銘を受けること自体、人の心の奥底にある情感によるのだと思う。教材文の深い意味は、読解や鑑賞を通して、筆者の心の奥底に観入するときに、はじめて「わかる」ものであろう。逆に言えば、読む者が筆者の心の奥底に観入し得たときに、そこに「感銘」が生じうるのだらう。「感銘」とはこ

読む者の胸に切々と迫るものがある。

私の食糧難の経験、腹がへって辛かった記憶は、昭和十八年度の高等学校の寮生活一年と軍隊生活の一年ほどの中にもあった。戦後の二、三年の生活の中にもあった。厳しい軍隊の訓練で、腹がへるのは楽ではなかった。耐えかねて干し大根を盗んだ男がいて、小隊(予備士官学校では「区隊」と言った)の全員が隊長から一晩きつい説教を食らったこともある。そのときは数時間の説教を全員が食らい、自己批判をさせられて済んだが、その男は、数日後の夜間訓練のとき、小隊付きの下士官に、少し離れた闇の中で、こっぴどくやられていた。その下士官の言い分は、下士官仲間から「お前の小隊にはひどい生徒がいるなど馬鹿に



ユニバーサルな教科書を目指して

国立特別支援教育総合研究所 総括研究員

澤田真弓

① 特別支援教育とは

そもそも特別支援教育とは何なのでしょ
うか。平成十五年三月に、文部科学省調査
研究協力者会議「今後の特別支援教育の在
り方について（最終報告）」が出されました。
それによると特別支援教育とは、

従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人一人の教育的ニーズを把握して、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために、適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うものである。

とあります。ここで重要なことは、特別支援教育の対象が通常の学級に在籍しているLD、ADHD、高機能自閉症等の発達障

② 小学校から中学校への移行期を考える

小学校から中学校への移行の時期、「中一ギャップ」などの言葉が聞かれるように、学習環境や生活環境の変化に対応できず、不適応を起こす生徒が出てくる場合があります。中学生になると学級担任制から教科担任制へと変わり、学習量の増加や友達関係も新たに築いていかなければならない状況が起こったり、さらには思春期特有の心の葛藤等々と、どの生徒も少なからず戸惑いやストレスが生じてきます。特にさまざまな変化への対応や友達とのコミュニケーション等に苦手意識をもっている発達障害等のある生徒にとっては、大きな試練の時期であるともいえます。

そのため、個々の生徒の状況を見極めて、

適切な指導や配慮が必要となります。学校に自分の居場所（心の拠り所）があること、それにはまずは授業がわかり、授業が楽しいと感じられることが大切で、自信を失って自尊心や自己肯定感が低下し、不登校や引きこもりに繋がることのないように丁寧に生徒を見ていくことが必要です。

③ いま、教科書に求められることは

さて、「1 特別支援教育とは」で述べたように、すべての学校において、特別支援教育が推進されており、そのための体制整備（特別支援教育コーディネーターの指名や校内委員会の設置等）は急速に進んできました。しかし一方で、具体的な指導方法となると苦慮している実態があるのも否めません。学校という中では、やはりどの生徒にとっても「授業がわかる」ということが大切です。三十人以上の生徒が在籍しているクラスで、支援が必要な生徒を含めて「わかる授業」を展開するためには、何が必要なのでしょうか。さまざまな側面から考えることができますが、まずは、特別支援教育の視点を取り入れた、誰にでも見やすい、わかりやすいユニバーサルな教科

表① 発達障害とは

	定義	具体的な現れ方
LD (Learning Disabilities =学習障害)	基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示すもの。	<ul style="list-style-type: none"> ▶よく似た文字を読み間違える ▶行をとばして読む ▶筆算の桁をずらして計算する ▶集団の中での指示を聞き漏らす など
ADHD (Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder =注意欠陥/多動性障害)	年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び/又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすもの。	<ul style="list-style-type: none"> ▶じっとしてられない ▶思った瞬間に行動してしまう ▶気が散りやすく不注意な間違いをする ▶カッとなりやすい など
高機能自閉症 (High-Functioning Autism)	3歳ぐらいまでに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないもの。 ※知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わないものを「アスペルガー症候群」と呼ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ▶変更や変化に対応しにくい ▶球技やゲームで仲間と協力して行うことがしにくい ▶あいまいな言葉の意味をくみとることが苦手 ▶同じものやり方にこだわる など

※ここに挙げた発達障害の定義は「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（平成17年12月8日、中央教育審議会）による。

書が基本としてあることです。

ところで、平成二十年六月に「障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律」が制定されました。この法律の目的は「教育の機会均等の趣旨にのっとり、障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及を促進し、障害等の有無にかかわらず児童及び生徒が十分な教育を受けることができる学校教育を推進すること」にあります。ここで「教科用特定図書等」とありますが、これは教科用拡大図書、教科用点字図書、その他障害のある児童及び生徒が学習するために作成した教材であって、検定用教科図

書等に代えて使用し得るものです。

弱視児童生徒のための拡大教科書を例にとれば、拡大教科書は、弱視児童生徒の視認特性を考慮して、原本教科書（検定用教科図書）を見やすいように、文字や図を大きくしたり、フォントや行間、色彩やコントラストの変更、囲み線を入れ各領域をはっきりさせる等々の工夫が施されています。

これらの工夫をして作成された拡大教科書は、弱視児童生徒のみならず、他の障害の子どもたちにも見やすく、わかりやすい教科書となっていることがわかってきています。これは当然と言えば当然で、見えにくさへの配慮とは、特別なことではなく、すべての生徒にわかりやすい環境を整えることの一つだからです。

障害特性に応じた拡大教科書や点字教科書等の普及はもちろん大切なことですが、その元になっている原本教科書そのものがユニバーサルなものであれば、多くの児童生徒が

さらによいかわからないような色合いまで出てきています。この中には配慮に欠ける色使いもあり、不便を感じるケースも少なからずあるのではないのでしょうか。色というのは、誰にでも同じようにわかりやすいものだと思われがちですが、案外そうではありません。他の人には明らかに違って見える色が同じように見えたり、背景の色との組み合わせや大きさによっても見え方に違いが出てきます。

① 色覚特性の観点から

私たちの周りを見渡してみると、さまざまな色であふれていて、「何色」と表現し

教科書にアクセスしやすくなります。文字等を拡大教科書のように大きくしないまでも、拡大教科書作成の技術的知識や情報を含めて、特別支援教育の視点から原本教科書を作成していく、それは取りも直さず、すべての子どもにとって見やすいわかりやすい教科書となります。

④ ユニバーサルな教科書とは

では、誰にでも見やすい、わかりやすいユニバーサルな教科書とは具体的にどのようなものなのでしょうか。クラスの中には、視力はもちろんのこと、色覚に特性のある生徒、読みや書きに課題を持っている生徒等々、多様な生徒が在籍しています。個々のニーズにより支援の方法や配慮は異なりますが、p.31に示した「教科書に求められる配慮」のような事項については、考慮していく必要があります。次にその中から「色使い」と「ページ構成」について、具体的に説明していきます。

アイスプラネット

椎名誠



● 作品に表れているもの
見方や考え方について
自分の考えをもつ
● 登場人物の言動や心情を
表す表現などに注意し、
作品を読み取る。

僕のおじさんは「ぐうちゃん」という。津田由起夫三十八歳。いそろう。僕の母親の弟だ。いつも母に怒られている。学生のころに外国のいろんな所を旅していたら、気づいたときには僕の家に住み着いていた。そして、長いこと「つた」しているから、いつのまにか「ぐうちゃん」というお名前になってしまった。でも、ぐうちゃんが変わった人、そう言われるんだからしょうがない。それを見て僕の母はまた怒る。怒りほど「これ、ぐうちゃんのお好物」なんて言いがら、ご飯の支度をしてくれるお母もちょっと変わっている。僕の家は東京の西の郊外にあって、父の祖父が建てた、古い家だけれど、ぐうちゃんが「いそろう」である六歳間がたって、そとぐうちゃんは「つた」している。父は車身駐在で他にいて、週末に帰ってくる。ぐうちゃんがいると何か力仕事が必要になったときに安心だから、と言って、父はぐうちゃんを歓迎している。ただ、ぐうちゃんを歓迎しているか、ぐうちゃんを歓迎しているか、唯一のタカラモノであるカメラの掃除、点検などをしていく。全く「つた」ばかりでもなくて、たまに「週間くらい留守

● 作品に表れているもの
見方や考え方について
自分の考えをもつ
● 登場人物の言動や心情を
表す表現などに注意し、
作品を読み取る。

目標

● 作品に表れているもの見方や考え方について、自分の考えをもつ。

● 登場人物の言動や心情を表す表現などに注意して、作品を読み取る。

アイスプラネット

椎名誠



僕のおじさんは「ぐうちゃん」という。津田由起夫三十八歳。いそろう。

僕の母親の弟だ。いつも母に怒られている。学生のころに外国のいろんな所を旅していたらしく、気づいたときには僕の家に住み着いていた。そして、長いこと「ぐうたら」しているから、いつのまにか「ぐうちゃん」というお名前になってしまった。でも、ぐうちゃんは変わった人で、そう言われるんだからしょうがない。それを見て僕の母

おこ
淡
怒る

拡大教科書(左)と通常の教科書(右)

拡大教科書は、文字を大きくするだけでなく、フォントや行間にも工夫が加えられている。また、「目標」の位置を変えるなど、文章のまとまりが認識しやすいように、レイアウトにも配慮がなされている。光村図書は、平成5年に、「すべての児童・生徒に等しく、学ぶ楽しさを味わってもらおうこと」を発行者の責務と感じ、教科書会社として初めて中学校国語の拡大教科書を編集・発行。そして、蓄積された経験や使用者の意見などをもとに、さらに読みやすい拡大教科書を目指して研究を続けている。

僕の母親

実際の文字の大きさとフォントの違い

通常の教科書 明朝体 11ポイント
拡大教科書 ゴシック体 22ポイント
(26ポイントと18ポイントの拡大教科書も作成)

最近の教科書はたいへんビジュアル化されてきています。さまざまな色を使い、さらに背景色や地模様があつたりとたいへん凝った美しい表現がなされてきています。もちろんそれらはその単元の内容のイメージをつかむ一助となっていたり、そこからメッセージ（情報）を発信してもいます。学習効果を高める観点からすれば、色を全く使用しないことは考えられません。だからこそ、それはすべての生徒にとってわかりやすく、見やすくなくてはなりません。さまざまな色覚特性にかかわらず、識別し

- 色使い**
- ・使用する色数は適当か
 - ・まぎらわしい色使いと組み合わせになっていないか
 - ・色覚に特性のある子どもにも配慮した色使いとその対応
- 文字の大きさ、フォント、行間、ルビ**
- ・見やすく、わかりやすくなっているか
- 文章**
- ・説明、指示等の文章は簡潔か
 - ・イラストや図解等の併用により理解を促す等の工夫
- 重要なポイント等の表し方**
- ・書体を大きくしたり太くしたりする
 - ・問題やまとめ等を枠囲みし、わかりやすくする
 - ・内容ごとに簡条書きする
- 図等の背景色や飾り**
- ・内容理解に必要な背景色や飾りかどうか
 - ・図表中の文字や数字が見やすいかどうか
- ページ構成**
- ・指導の順、思考の順の構成になっているか
- 写真・図・内容ごとの区別**
- ・各領域がはっきりしているか
- 学習の目標や手順**
- ・何をするのか等の見通しがもてるか
 - ・学習の振り返りができるようにチェック欄を設ける等
- イラスト**
- ・本文に合ったイラストか

教科書に求められる配慮（具体例）

表② 色使いのポイント

<input checked="" type="checkbox"/>	色だけに頼った情報提供をしない ・色に文字や記号を書き加える ・輪郭線や境界線で塗り分けの境を強調する
<input checked="" type="checkbox"/>	暖色系と寒色系、明るい色と暗い色を対比させる
<input checked="" type="checkbox"/>	パステル調の色どうしを組み合わせない ・はっきりした色どうしか、はっきりした色とパステル調を対比させる
<input checked="" type="checkbox"/>	文字に色をつけるときは、背景と文字の間にはっきりした明度差をつける
<input checked="" type="checkbox"/>	文字に色をつけるときは、線の細い明朝体でなく、線の太いゴシック体を使う。
<input checked="" type="checkbox"/>	色だけでなく、書体（フォント）、太字、下線、囲み枠など、形の変化を併用する
<input checked="" type="checkbox"/>	白黒でコピーしても内容を識別できるか確認してみる

やすい配色の使用や工夫、配慮が必要となります。単にカラフルさを求めて多色使いになっていないか、本当にここでこの色使いが必要なのか、どのような意味や役割をもっているのかを考えていく必要があります。単元によっては、グラフや写真、イラストから判断して説明したり文章を作ったりすることが求められます。まず読み取っていく元になるものが誰にでもわかりやす

く表現されていなければ、本来、生徒たちにつけようとしている力はつきません。簡単に「色使いのポイント」を表②に示しましたが、色使いの基本は、見分けやすい色を使い、色だけに頼った情報提供をしないことです。また見分けにくい配色でも、明度差をつけたり、境界線をはっきりさせることにより、見分けやすくなりますのでそれらの工夫と配慮をすることが必要です。

② ページ構成の観点から

例えば、教科書を開けば、その単元で学ぶことがまず視覚的に理解できるといいうわかりやすさも必要です。内容はもちろん重要ですが、そうした構成面での工夫も大切な要素となります。

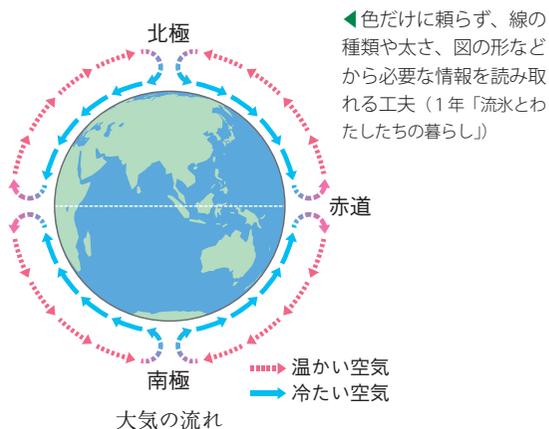
支援が必要な生徒のみならず、文章中に表現されている概念の枠組みをビジュアルに構造化してあったり、ここでは何を学習するのが初めに示されていると、学習を進めていくにあたり大きな助けとなります。視覚的に把握しやすい図や簡条書きでわかりやすく学習の進め方や目安が示されており、「おおよそこんなことが書かれている、このような学習をする」という先行的知識を得てから文章を読む場合とそうでない場合とは、読みにかかる負荷や理解度

が違ってきます。また、段組されたページや見開きページで見せる場合の文章の読み進める順番や文字の方向等、レイアウトの望ましい在り方についても配慮が必要です。「すべての生徒に知識や情報を伝える」という目的をもった教科書であれば、こうしたページ構成面での工夫や配慮も看過すべきではないと思います。

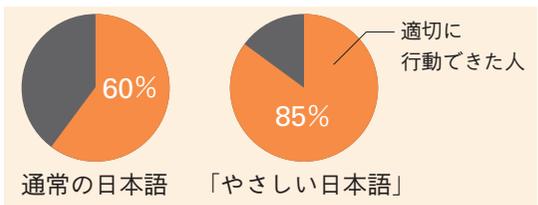
⑤ わかる授業で「学力向上」

先生方は、これらの工夫や配慮のなされたユニバーサルな教科書を使い、個々の障害特性に応じた支援方法や配慮を加味した指導計画を立て、授業を展開していきます。例えば、授業の始まりに一時間の流れを視覚的にわかるように提示して見通しをもたせたり、できるだけ簡潔で具体的な言葉を使って授業を進める、わかりやすい板書の工夫や質問・指示の出し方、また、苦手な課題が予測される場合は、あらかじめその支援方法を考えておく等々、日々の授業を見直していくことが大切になります。

ユニバーサルな教科書と指導者の配慮が相まって、「わかる授業」、さらには「学力向上」につながっていくのです。



色だけに頼らず、線の種類や太さ、図の形などから必要な情報を読み取れる工夫（1年「流水とわたしたちの暮らし」）



図表の中で、複数の色を用いるときには、暖色系と寒色系、明るい色と暗い色を対比させる工夫（2年「やさしい日本語」）

項目を整理して伝えよう

学校生活の中では、「お知らね」などの案内文を読む機会が多々ある。ここでは、案内文を作る側になり、事務的・目的に合わせた項目を立て方や、相手に伝わりやすい書き方を考えていく。

目標

- 1 伝える事情・目的・相手に応じて、項目を立てる。
- 2 案内文の書き方を知らない、項目を立てにくい。
- 3 項目を立てる順番や優先順位がわからない。
- 4 実際に案内文を作成する。
- 5 作成した案内文を発表する。

学習の見通しをもとう

つづいて、先生方へ

▲指導の順、思考の順がわかりやすく、何をするのか見通しがもちやすいレイアウトの工夫（1年「項目を整理して伝えよう」）

新しい学習指導要領と 新版「書写」教科書

学習指導要領の改訂を受け、書写の教科書も大きく変わりました。よりわかりやすく、より使いやすくなった新版教科書の具体的な特徴について、編集委員の宮澤正明先生にうかがいました。

Q1 平成二十四年度から完全実施される学習指導要領は、現行に比べてどこどころが変わったのでしょうか。

大きく三つのポイントが挙げられます。

- ① 三年生の学習事項が独立
- ② 行書の確実な定着を求める
- ③ 一年生と二年生の履修時間が同程度に

① 三年生の学習事項が独立
これは、今回の改訂でいちばん大きな

Q2 新しい学習指導要領で求められている「限られた時間での、行書の確実な定着」については、どのような工夫をしていますか。

各単元を段階的な「ステップ」構造にし、それを繰り返しながら学習を行うことで、基礎・基本の徹底が図れるようになっていきます。

また、行書の書き方の規則性・法則性ごとに漢字を分類し、汎用性のある書き方のポイントをまとめた教材を設定しています。一字ずつばらばらに覚えるのではなく、漢字の同じ部分ごとに分類して覚えることで、短時間で効果的な学習ができます。

さらに、なぞり書きや書き込み欄を随所に設定し、積極的に何度も書いて慣れる工夫も取り入れています。

特別編2

変更点です。中学校国語科書写は、現行の学習指導要領では第一学年と第二・三学年の二つに分けられていましたが、新しい学習指導要領では、学年ごとに学習指導内容が示されました。

② 行書の確実な定着を求める
二年生に「目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと。」という新しい学習事項が加えられました。日常生活での行書の活用を目指したもので、行書の習得が前提となります。三年生では「文字を効果的に書くこと」という学習事項が新たに加えられ、さらなるステップアップが求められています。

一年二単元
「行書を書くこと」の
ステップ構造例

ステップ 1

「行書の特徴を知ろう」
行書の五つの特徴を知る

ステップ 2

「点画の方向や形が変化するときの筆使いを知ろう」
行書の五つの特徴のうち、方向や形の変化を理解する

ステップ 3

「点画が連続するときの筆使いを知ろう」
行書の五つの特徴のうち、連続を理解する

ステップ 4

「書いて確かめよう」
ステップ1〜3で理解したことを毛筆で確認する

ステップ 5

「行書の特徴を確かめて書くこと」
ステップ1〜4で理解したことを硬筆で確認する



みやざわ まさあき
宮澤正明
山梨大学教育人間科学部教授、大東文化大学講師。1952年、静岡県生まれ。光村図書の小・中学校書写、高等学校書道の編集委員。
著書に、『書写なんでも百科第3・4巻』（岩崎書店）、「毛筆書写墨場必携」（日本習字普及協会）など。

日常的に行書が書ける生徒の育成を目指す新しい学習指導要領に因應するには、限られた時間での行書の確かな習得が望まれます。

③ 一年生と二年生の履修時間が同程度に
一年生の履修時間が年間二八単位程度から「二〇単位程度」に減り、二年生は一〇・五単位程度から「二〇単位程度」に増えました。

内容的な面では、一年生は現行版とほぼ変わらず、二年生は②で述べた学習事項が増えました。一見、学習負担増に感じますが、一年生の学習事項の半分は小学校の復習（楷書）を兼ねています。

規則性・法則性ごとに漢字を分類

ステップ 5 行書の特徴を確かめて書くこと
行書の特徴を確かめて、なぞってみよう。

方向や形の変化				
北	空四	木	立	大
短い左払い、左から右へ書く。	左払いや曲がりの形が変わる。	縦画の終筆は、次の画に向かってはねる。	点の終筆は、次の画に向かってはねる。	右払いの終筆は止める。
風系	究西	信東	示六	文文
考係	深要	往弟	赤音	欠欠

確認しよう

同じ部分ごとに分類したり、なぞり書きをしたりすることで、効果的な学習が可能に



1〜3年が一冊に

▼ P.14

3 仮名の筆使いを確かめよう 国語

仮名の筆使いには、どのような特徴があったかな。
「いろは歌」で確かめて書こう。

【平結び】
左側の1か所を穂先の向きを変える。

【三角結び】
下側と左側の2か所を穂先の向きを変える。

いろはにほへに
ほろろろ波波波はににに保保保ほ

3 点画が連続するときの筆使いを知ろう

点画が連続するときの筆使いを見よう。

【行書】 石 **【楷書】** 三

折り返して方向を変える。

次の画の始端に向かって方向を変える。

面の筆は折り返した方向で書かれています。

筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう。

▲ P.29

形式の上での大きな変化は、1〜3年が一冊になったことです。これまで1年用と2・3年用の二分冊でしたが、新版は全学年で一冊になりました。学年を超えた学習の見直しや振り返りを容易にできるようにするためです。（詳細は次号で特集します）

Q4 これまでの教科書と比べて、どんなところが変わりましたか。

内容面では、文字を書く上での「知識」を丁寧に解説したこと、それを視覚的にわかりやすく示したことです。これは、生徒が学習する上ではもちろんのこと、指導者の使いやすさにもつながってきます。

書写を指導するときには、技能だけでなく知識も必要です。例えば、平仮名の学習であれば、「は」の最後の結び方は「波」という字に由来するから、最後の左払いと右払いの交差するところが連続

してこのような形になったんだ、ということが理解されていると自然に丸く結べるようになります。こうした、漢字から平仮名になったプロセスを理解できていると字形も整ってきます。つまり、字形を整え、正しいものするための知識をきちんと解説しているのです。

技能を示した図版にこうした解説を付け加えることによって、書写が専門でない先生方にも、授業の展開がわかりやすくなると思います。

ジャンプ

よいところを伝えよう

学習したことを生かして、友達の良いところを漢字・文字で表し、行進で書こう。

学習したことを活用しよう

1. 考える
 - 紹介する人を決め、その人にふさわしい漢字を考える。
 - 何に書くかを決め、文字の大きさを配列を考える。
2. 書き表す
 - 行書の特徴を生かして書く。
 - スタンプシート(P40~47)の筆具を選んで書く。
 - 筆使いや字形に気をつけて書く。
3. 広げる
 - 日常につなげる。

中野陽さん
いつもクラスのみんなを笑わせてくれる、楽しい人です。
紹介者 高橋 勇紀

千葉みのりさん
どんなときもマイペースで落ちついていて、種やかな雰囲気になってくれる人です。
紹介者 森 絵里子

省紙を意識して半紙に書いたよ。

筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう。

▲ P.48

4. 発表しよう

文字もじ 調査報告

発表1 庄勝 遂に最強2冠

発表2 海遊

発表3

発表4

発表5

発表6

発表7

発表8

発表9

発表10

発表11

発表12

発表13

発表14

発表15

発表16

発表17

発表18

発表19

発表20

4 広げよう 書写の輪

絵手紙で気持ちを伝えよう

先生に

部活動の先輩に

親戚の人に

今年卒業に行きます。東京文芸大学に行きます。行ってきます。行ってきます。行ってきます。

いつも応援しています。理香

筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう、筆先が折らぬよう。

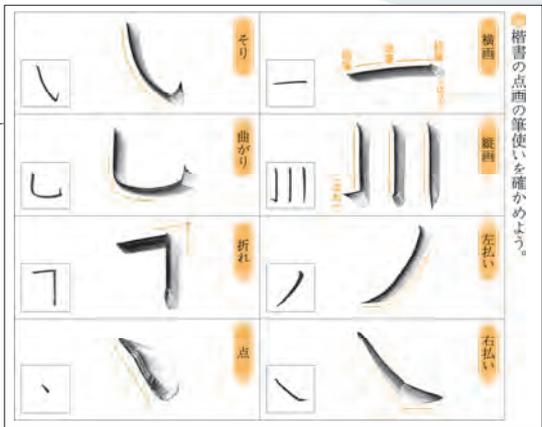
▲ P.62

Q3 新しい学習指導要領では、言語活動の充実が求められています。が、新版ではどのような活動例が取り上げられていますか。

新版教科書では、言語活動を積極的に取り入れた書写の授業を提案し、技能の習得に偏りがちな書写から、日常に密着した書写を目指しました。

従来の授業では技能の習得が中心で、生徒が受け身になりがちでしたが、新版では、技能を支える知識も大切と考え、理解を深めるための話し合いの教材を全学年に設定しています。また、キャラクターを使って、話し合いのヒントを示すなどの工夫もしています。これにより主体的な学習が展開でき、より確実な知識の定着が図れます。

さらに、習得したことを日常に生かす「ジャンプ」や、目的意識や相手意識を重視した書く活動を示す、発展教材「広げよう」もあります。また、書籍デザイナーに文字との関わりをインタビューしたコラムなど、読み物として文字文化について考えさせる教材も位置づけました。



<p>左払い</p>		<p>右払い</p>		<p>縦画</p>		<p>横画</p>			
<p>そり</p>		<p>曲がり</p>		<p>折れ</p>		<p>右上払い</p>		<p>点</p>	

1 漢字の筆使いを確かめよう

次の点画の筆使いは、どうなっているだろう。

●筆圧をどのように調節するよいか。

●穂先は、どこを通っているか。

Q5

小学校書写とのつながりはどう図られていますか。

まず、教科書の冒頭で、小学校で学んだ楷書の筆使いの特徴をもう一度視覚的に大きくまとめました。これまでは、簡単に図で示すだけでしたが、新版は言葉も添えて、丁寧に解説しています。知識と技能をリンクさせて、一つ一つの特徴をしっかりと確かめながら、中学校の学習のスタートが切れるのです。

1

漢字の筆使いを確かめよう

次の点画の筆使いは、どうなっているだろう。

●筆圧をどのように調節するよいか。

●穂先は、どこを通っているか。



Q6

これからの書写指導で、いちばん大事にしたいことはどんなことでしょうか。

書写教育の長い流れの中で、いわゆる技術偏重主義、あるいはお手本主義といわれるものが課題となっていました。もちろん、教科書の教材文字を見ながらひたすら書くということは、それなりの効果があります。しかし、限られた時間の中での効果や、「思考力・表現力・判断力」をつける学習の必要性を考えると、やはり授業の形は変わっていかなくてはならないと思います。

そのために必要なのは、コミュニケーションではないでしょうか。黙々と文字を書き続けるのではなく、グループで課題を作って討議しながら解決をしていくという授業も面白いですね。新しい学習指導要領で強調される言語活動の充実ということは、実は授業の多様化と重なるのです。

新しい教科書には、そういう授業の展開がしやすい工夫をたくさん取り入れています。ぜひ、先生方ご自身も書写を楽しんで、授業を活性化させてください。

「やまなし」の シュールな会話？

京都教育大学教授

森山卓郎もりやま たくろう

宮沢賢治の「やまなし」は好きな作品の一つだ。すぐ近くにある死。かわせみのような存在もやってくる。しかし、なんともうっとりするようなやまなしのような存在もやってくる。いろいろとやってくる運命を受け入れるしかない私たちの生の弱さ、寂しさ、ささやかな喜びとが、瞬間瞬間の美しい描写と共に描かれる。例えば出てこないお母さん蟹のことも含め、身を寄せ合って生きるかのような親子のほのぼのとした感じも好きだ。

しかし、この冒頭の会話は、なんとなくというか、実に謎めいている。

「クラムボン は 笑 っ た よ。」

「クラムボン は かぶ かぶ 笑 っ た よ。」

「クラムボン は はねて 笑 っ た よ。」

「クラムボン は かぶ かぶ 笑 っ た よ。」

実は小学校のころ、これはシュールな会話だと思った。会話として流れていないのだ。どんな兄弟や、こいつら？——普段の感覚で考えてみる。

A 「○○はお茶飲んだよ。」

B 「○○はがぶがぶお茶を飲んだよ。」

いくら子どもでも、そんな会話、します？

確かに会話文が並んでいると、会話としては交互に話をしていると解釈するのがふつうだろう。が、独立したかぎ括弧の発話でも、「間」があり、時間の流れがあれば、同じ人物の会話を独立して書くことはあっていい。逆に、そうすることで、流れていく時間も感じられる。

そう、この部分、私は二人が交互に話す会話ではないと考えている。おそらくは弟蟹がクラムボン（たぶん自分

が吐く泡のことだと思うが、わからない。流れる泡は別に「泡」とされている)を見て、しばらく一人で話しているのではないか。そう考えると、「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」

というお兄さん蟹の言葉もしくりくる。ここで兄が弟の文脈に入ってくるわけだ。

もっとも最終的にはわからない。それが解釈の自由性というものだろう。ただ、一つ一つの会話文について、どういう状況で誰がこの文を言ったのかということについて、立ち止まって考えてみることは大切なはずだ。ぜひ子どもたちに主体的に考えさせたい。もちろんシュールな解釈も自由！

知る喜び、 学ぶ楽しさ、 光村から

光村図書の書籍

ご注文は、最寄りの書店または
弊社ホームページへ。



新刊
私の中の自由な美術
鑑賞教育で育む力

■日本人はなぜ絵の見方に自信がないのか!? 国民病ともいえる謎に深く切り込んだ書。自分らしい「自由な鑑賞」が見つかるよう、様々な事例を元にわかりやすく解説。

著者 = 上野行一
A5判・175頁
定価 = 1,995円



第2弾は夏発売(予定)
読書力アップ!
学校図書館のつくり方

■この一冊で図書館が劇的に変わる! 学校図書館のBefore → After。図書館改装のノウハウがぎゅっしり。小・中学校15件、高等学校5件のリフォーム例も掲載。

著者 = 赤木かん子
B5判・128頁
定価 = 2,520円



子ども力がいっぱい
河合隼雄が聞く
「あなたが子どもだったころ」

■河合隼雄をホストに、山本容子、鶴見俊輔、筒井康隆、佐渡裕、毛利衛、安藤忠雄、三林京子らが、自らの個性や活躍を裏付ける幼い日のエピソードを語る。

著者 = 河合隼雄
B5変・202頁
定価 = 1,800円



奇跡の学校
おといねづの森から

■北海道のいちばん小さな村で寮生活を送る美術工芸高校の生徒たち。教師や仲間、村の人々との交流を通じて繰り広げられた9つの「青春ノンフィクション」。

著者 = 石塚耕一
B6判・224頁
定価 = 1,470円



光村ライブラリー・
中学校編

■昭和30年から平成14年までに中学校国語教科書に掲載された中から71作品を厳選収録。授業の発展教材として、また「朝読」のよみものとして活用ください。

著者 = 井上靖ほか
菊判・平均120頁
各巻定価 = 1,050円



第2弾は5月発売(予定)
英語を教える50のポイント

■明日の授業にすぐ使える50の技を紹介。「先生と生徒のやりとり」をイラストで多数掲載しているため、授業の様子が一目でわかります。授業で使える付録も充実。

著者 = 太田洋
A5判・167頁
定価 = 1,995円



子供は悪いのが好き
スクリーンの中の幼年時代

■「恐るべき子供たち」「ブリキの太鼓」「キッド」…古今東西、有名無名の映画に登場する「悪くて、イジワルな」子供たちを語り尽くす、著者異色のエッセイ集。

著者 = 四方田犬彦
A5判・206頁
定価 = 2,310円



藤原流
200字意見文トレーニング

■「よのなか科」「夜スベ」などで知られる前杉並区立和田中学校校長・藤原和博氏が、未来を生き抜くための「柔らかなアタマ」を作るノウハウを紹介。ワークブック付。

著者 = 藤原和博
B5判・112頁
定価 = 1,680円

光村図書

中学校 国語教育相談室 通巻No.139 2011(平成23)年4月11日発行 定価126円(税込)

発行人 = 常田 寛 発行所 = 光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

http://www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp

印刷所 = 協和オフセット印刷株式会社 デザイン = mint grafix 撮影 = 高宮青志

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
http://www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。